



前潟干潟研究会について

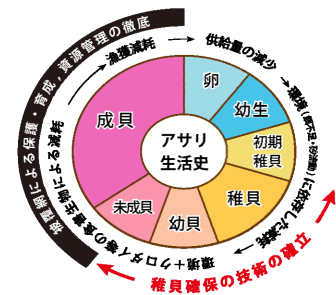
前潟干潟研究会は、日本三景の安芸の宮島と対岸の廿日市市の間にある大野瀬戸の干潟で活動を行う組織である。

当地区は、県内一のアサリ生産地である。アサリ漁業の歴史は古く、100年以上前から各個人に割り当てられた区割り漁場で持続的に漁業を営んできた。

しかし、近年、海域の貧栄養化・クロダイ等による食害などによってアサリ資源が大幅に減少し、その対策が求められた。

当地区では、平成20年代前半に被覆網を用いた食害対策が、各区割りの漁業者の間で一般化され、一定量の親貝を安定的に保護することが可能となった。ただし、資源の回復には至らず、地元産稚貝の確保とその保護が求められた。

そこで、アサリ資源再生のための試験研究や技術開発を行う「前潟干潟研究会」を平成25年度に設立し、稚貝確保の技術確立に向けた取り組みをスタートした。



前潟干潟研究会の取り組み

当研究会の役割は、アサリ資源再生のための試験研究や技術開発を行い、その成果を地区の漁業者に普及することである。

当面の目標は、稚貝400万個を確保する技術の確立である。

設立当初は、ケアシエル等を用いた「網袋採苗」を実施したが、上手くいかなかった。そこで、春先に米粒大のアサリが数多く生息する干潟で、稚貝の集積場所を見つけ、その場所で砂ごと網袋に入れ稚貝を短期間保護・育成する方法「大野方式」を平成27年度に考案し、28年度以降に本格化した。



活動を本格化した28年度以降は、調査段階から稚貝密度の低下がみられたことから、①稚貝集積場の干潟を複数選定したり、②稚貝の採取面積を増やす工夫をしたり、技術を深化させた。加えて、1袋800個弱(H28年水準)の稚貝を確保した時に、目標の400万個を達成するには網袋5千枚の設置が必要となるが、それを上回る設置数ができる体制を3年に亘ってつくれたことは、今後の資源再生の促進につながる大きな成果となった。

年度	稚貝確保の実績			
	設置袋数	参加者数	回収量/袋	総回収量
H27	458	83人・日	1,288	59万個
H28	3,400	170人・日	788	268万個
H29	10,400	530人・日	212	220万個
H30	10,250	565人・日	187	192万個
R01	7,500	416人・日	117	88万個

新たな検討 アサリの保護対策に関する再点検

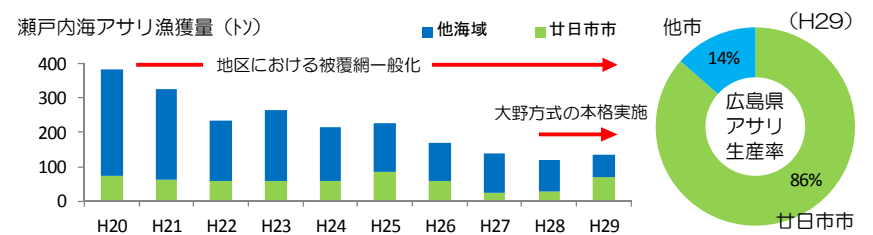
(1) 被覆網によるアサリ保護・育成の課題

最近、瀬戸内海のアサリ総漁獲量が減少している。その中でも、当地区の廿日市市では、漁獲量が概ね横ばい。また、直近、平成29年度の漁獲量は70トンで、広島県の86%、瀬戸内海の53%を占めるまでになった。

廿日市市でアサリ漁獲量が安定しているのは、被覆網によるアサリの保護・育成によるところが大きい。また、この保護・育成が母貝の確保につながり、資源の再生産を促している。加えて、新たに技術が確立した稚貝の確保が、アサリの生産や資源の再生産に好循環をもたらす。

現在、当地区の被覆網によるアサリの保護・育成は、平成20年代前半に一般化されてからは、区割り漁場で各漁業者が自主的に網を張り、管理している。被覆網の設置やその維持管理は、費用と労力を要す。

今後、高齢化にある当地区で本対策を持続させるには、より効果的な網の張り方、より効率的で簡便な維持管理手法の検討が求められる。



(2) 被覆網対策の再点検

現在、当研究会では、稚貝確保の活動に加え、被覆網対策の再点検を行っている。再点検は、一定の間隔で長期間撮影可能なタイムラプスカメラを用いて、アサリ捕食者の被覆網上での出現状況や行動、海中での被覆網の様子など観察する。

これまでの観察で判ったことは、以下の通り。

- ・被覆網上にクロダイやエイ類、フグ類など様々な魚が来襲し、摂餌行動を示す → 適切な網の張り方、目合選定が重要
- ・浮子を装着した被覆網の隙間からクロダイが侵入 → ベタ張りが適
- ・各区割り漁場間の被覆網が張られてない場所が捕食魚の好適な餌料場になっている → アサリ捕食魚の来襲を助長する？

今後も観察を続け、適切な網の張り方や網の交換時期、外せる時期等の検討を行い、より効果的・効率的な対策を図る。



うれしいできごと

現在、われわれの活動が広く一般に知れわたり、地元中学校の「職業体験」や「海の日本プロジェクト in 広島」の子どもたちの取り組みの題材に挙げられるようになった。また、当地区のアサリの特性やその管理方法が国に認められ、「大野あさり」として地理的表示(GI)保護制度の対象に登録された。こうした出来事が地域の活性化につながってきている。

